

パチスロ史

～誕生から5号機まで～

吉國純生

山佐株式会社 執行役員

第1回

パチスロの起源

パチスロとは、パチンコ店等に設置されるスロットマシンのことである(正式名称は回胴式遊技機)。今日、当り前のようにパチンコ店に設置されているパチスロは、専門店も多く存在し、今やパチンコから独立したかたちでその地位を確立して久しい。

台の方に目を向けると、液晶で賑やかな演出を繰り広げたり、圧倒されるくらい迫力あるボーナス告知を行ったりと、演出に凝った機種があるかと思えば、パチスロ本来の楽しさであるリーチ目などの出目を主体とする機種などもある。ゲーム性に目を向けると、ボーナスを重ねてメダルを増やしていく機種やART(アシストリプレイタイムの略)と呼ばれる特殊状態の継続でメダルを増やしていく機種などがある。演出、ゲーム性は千差万別で、今日のパチスロは驚くほど多種多様化している。

古くからパチスロを知る方々は、今日のパチスロが有名キャラクターを使用していることや、演出を最大限に活かした筐体のつくりになっていることに、昔とは違うパチスロの魅力を感じているのではないだろうか。

近年、パチスロを知り業界に携わるようになった方々は、その作りこみの深さに驚かれていることだろう。

幾多の試行錯誤と 紆余曲折を重ねて

一見、大きな問題もなく、エンドレスに進化を続けているように映るパチスロであるが、その道のりは、決して順風満帆であった訳ではない。幾多の試行錯誤を重ね、紆余曲折を経て今日に至っている。パチスロは、パチンコに比べると歴史は浅いが、それでも現在の箱型マシンの誕生からちょうど30年前身のオリンピアマシンの誕生からは45年が経過している。パチスロの歴史を紐解いていくと、今では考えられないような出来事に驚かされ、それまでとは違った視点でパチスロを見るようになるだろう。

パチンコに比べれば「若い」といえますが、パチスロの歴史も半世紀の刻を刻もうとしています。すでに遊技産業の中で確固たる地位を築いていますが、スロットマシンを原型としたパチスロは、一時爆発的な人気があったとはいえ、多くの困難をかかえながら発展を続けてきました。その姿がどのようなものであったか、その歴史とともに歩んできた吉國純生氏に筆を執っていただきました。

「リバティ・ベル」から1世紀
絵柄が歴史を引き継いでいる



【写真2】リバティ・ベル

ここでは、その歴史を数回に分けて紹介していこうと思う。今日に至る道のりを知ってもらおうことで、パチスロへの更なる魅力を感じ取ってもらえれば幸いであるし、執筆筆利に尽きるというものである。

なお、様々な資料をもとに私なりに整理したつもりではあるが、ここに掲げた事項は、パチスロの歴史の中のほんの一部であり、不足、誤解の事項についてはご容赦いただきたい。

19世紀の終わりに リール型式が誕生

では、パチスロの歴史を振り返ってみよう。

パチスロの歴史を辿ると、誰もが想像するとおり、アメリカのスロットマシンに行き着く。アメリカでは、1890年代にスロットマシン開発の動きが見られるようになる。1898年にドイツ移民の機械技術者チャールズ・オーガ



【写真1】チャールズ・オーガスト・フェイ



【写真4】リパティ・ベル・ガム・フルーツ
(リール絵柄)

スト・フェイ【写真1】が、最初のリールスロットマシンと呼ばれる『カード・ベル』を発明し、翌

1899年に改良が加えられた『リパティ・ベル』【写真2】を誕生させている。両機種とも、3本のリールが回転して、絵柄が揃うと硬貨を払い出すという仕様であった。

『カード・ベル』は、名前にあるベル絵柄を採用していなかったが、『リパティ・ベル』は、ベル絵柄を採用しており、ベル3つ揃い時に払い出しがあった。パチスロにベル絵柄が普通に使われていることもあつてか、『リパティ・ベル』をスロットマシンの元祖と見る傾向にある。いずれにしろ、現代パチスロの基本概念が100年以上前（日本は明治時代）に誕生し、今日に受け継がれてきているのだから驚くばかりである。

ベルからフルーツ そしてチェリーまで

ベル絵柄の話が出たので、ここでリールの絵柄について触れることにしよう。

パチスロのリール絵柄の代表格といえば、ベルのほかフルーツがある。1910年にミルズ社がスロットマシン『リパティ・ベル・ガム・フルーツ』【写真3】でブラム、レモンといったフルーツ絵柄を初めて登場させている。この機種名にあるガムとは硬貨の代わりにガムが払い出されることを意味しており、ガムの商標絵柄とスペアミントの葉の絵柄もリール絵柄に採用している【写真4】。特にガムの商標絵柄は、その後「BAR」絵柄に変化し、現在もジャグラーシリーズで使われているなど、馴染み深い絵柄（綴り）となっている。賭博性の高さを懸念して発明されたガムの自販機付きスロットマシンであるが、絵柄という部分においてパチスロに与えた影響は非常に大きいと言える。



【写真3】リパティ・ベル・ガム・フルーツ



【写真5】オペレーターズ・ベル



【写真6】ミルズ社製 ハイトップモデル

さらにミルズ社は、同年、ガムの自販機が付かないスロットマシン『オペレーターズ・ベル』【写真5】を製造する。『オペレーターズ・ベル』では、絵柄がスペアミントの葉から、チェリーに代わり、以後、チェリーは代表的絵柄として今日

に受け継がれている。

ミルズ社製のスロットマシンは、この他にもアメリカで多数登場する【写真6】。やがて日本にも、アメリカ軍によって持ち込まれ、戦後の沖縄に初上陸を果たす。硬貨を投入して、レバーを引き、有効ライン上に絵柄が揃うと硬貨を払い出す。このミルズ社製のスロットマシンを参考に国産スロットマシンは作られていく。ちなみに余談となるが、私の部屋には、アメリカのラスベガスで購入したミルズ社製のスロットマシンを複数台飾っている。歴史を感じさせる古い台ではあるが、現代パチスロとは違う輝きを放っている【写真7】。

セガの前身が開発に乗り出す

1950年代に入り、アメリカ外資系のサービス・ゲームズ社がスロットマシンの開発に乗り出す。サービス・ゲームズ社は、大手ゲームメーカーのセガの前身にあたり、セガの社名の由来は、SERVICESの「SE」・GAMESの「GA」をとって結合したものとされている。

ここで少しセガの歴史を辿って

みる。1960年にサービス・ゲームズ社は解散し、営業部門の「日本娯楽物産」と製造部門の「日本機械製造」に分裂する。1964年に「日本娯楽物産」が、「日本機械製造」を吸収合併する。1965年に「ローゼン・エンタープライゼス」と経営統合し、社名を「株式会社セガ・エンタープライゼス」に変更。さらに2000年に「株式会社セガ」になり、2004年には「サミー株式会社」と経営統合して、親会社「セガサミーホールディングス株式会社」の完全子会社となって現在に至っている。

ちなみにセガの代表取締役会長CEOは、サミーの代表取締役会長CEOでもあり、回胴式遊技機製造業者団体「日電協」の現理事長でもある里見治氏である。

さて、話を戻そう。サービス・ゲームズ社は、ミルズ社からスロットマシンに関する特許を買取り、ミルズ社製スロットマシンのコピー品の製造を開始する。その第一弾として『セガ・ベル』を製造、さらにその後、オリジナル筐体の開発に着手し、25セント仕様と10セント仕様とがある『ダイヤモンド3スター』【写真8】、5セント

仕様の『ロードセガ』等を製造し、沖縄にだけ設置していった。言い方を変えると、沖縄にのみ設置することができ、日本本土には設置できなかったということである。これは、賭博性の高いスロットマシンの設置は到底許されるものではなかったが、当時の沖縄がアメリカの統治下にあったという背景が、設置を可能にしていたことを示している。

そんな沖縄であっても、硬貨を使用するスロットマシンに琉球警察（沖縄県警察の前身）の指導が入り、代わってメダルを使用するスロットマシンが登場することに。セガの『ボナンザスター』【写真9】が最初だと言われている。以後、オリンピアマシンの登場、さらには1972年の沖縄返還に伴う硬貨を使用するスロットマシンの全面的禁止があり、沖縄においてもメダルを使用するスロットマシンへ完全移行していく。

オリンピアマシン 正式に警察の許可

沖縄の特殊な事情については先述したが、日本本土ではどのような動きが見られたのか。時は19

64年、東京オリンピック開催の年。日本で初めてのオリンピック開催ということもあり、日本全体がオリンピックムード一色となる。そんな中、翌1965年、セガがオールメカ製の1メダル1ラインのスロットマシン『オリンピア・スター』【写真10】を発表する。価格



【写真8】ダイヤモンド3スター



【写真9】ボナンザスター



【写真10】オリンピア・スター

【写真7】部屋にかざっているミルズ社製マシン



は、当時の価格で35万円というから非常に高価なものであった。販売は、セガと「大東貿易株式会社（現在の株式会社タイトー）」がおこなった。セガは、続けて『ニュー・オリンピア』【写真11】、「オリンピア・マークIII」【写真12】を発表する。いずれの機種名にも入っている「オリンピア」とは古代オリンピック発祥の地のことであり、リール絵柄にも競技等、オリンピックに関係するものが採用されている。これらは東京オリンピック開催頃に登場したこともあって、オリンピアゲームマシン（略してオリンピアマシン）と称されるようになる。

オリンピアマシンは、賭博性が高いとして設置が認められなかったアメリカ製やそのコピーマシンとは異なり、正式に警察の許可を取ったスロットマシンということが最大の特徴となる。では、許可を取った（許された）ポイントを簡単に述べよう。

そもそも、賭博性が高いスロットマシンとは、何を持ってその位置付けられるのであろうか。当時の警察は、賭博性が高いスロットマシンの定義について、主に二つの見解を示している。一つは、アメリカ通貨とは言え、硬貨を直接使用していること。二つ目は、レバーを引いて自動停止

するだけでは、機械の偶然性に拠るものが大きく、技術介入の余地が乏しいということである。これに対してオリンピアマシンは、硬貨ではなくメダルを使用。また技術介入という観点から、遊技者自らができるストップボタンを設けた。これらの仕様を取り入れることで

登場を許されたのである。

1965年、オリンピアマシン専門店が東京の銀座に誕生し、2年後には大阪にも誕生している。最初は珍しさもあってか、多くの人が訪れ賑わいを見せたが、次第に下火となっていく、長期繁盛には至らなかった。特殊景品を扱っていなかったことも衰退する原因の一つと言われている。

チューリップに押され 10年で尻すぼみに

この時代のパチンコ事情についても少し触れておこう。1960年にパチンコ遊技機製造業者団体である「日本遊技機工業協同組合」が設立。1963年に「日本遊技機工業組合（日工組）」に改組され、現在に至っている。このような組織編成が行われた1960年代に画期的な役物「チューリップ」が考案され、1966年にはチューリップ全盛時代へと突入する。パチンコ人気で盛り上がる最中に登場したオリンピアマシンは、結果的にパチンコと肩を並べる存在には程遠く、やがて手持ちメダルがなくなるまで遊ぶというゲーム感覚のマシンとして位置付けられる

ようになるまで遊ぶというゲーム感覚のマシンとして位置付けられる



【写真11】ニュー・オリンピア



【写真12】オリンピア・マークIII

ようになり、誕生からおよそ10年で終焉を迎えることになる。

それまでオリンピアマシンを牽引してきたセガとタイトーは、業界から完全に撤退し、のちにテレビゲームやアーケードゲームで世界に進出することになる。以後、輸入されたスロットマシンをゲームセンターで見かける程度で、国産のスロットマシンはその姿を消していく。

このまま、国産のスロットマシンは完全に消えていく運命にあるのか。そんな時、暗闇に一筋の光を射す機種の登場で業界は新しい時代へと突入していく。